

先進医療Bの継続の可否に係る指摘事項(伊藤構成員)に対する回答

先進医療技術名：コラーゲン半月板補填材を用いた半月板修復療法

2017年11月28日

所属・氏名：大阪大学大学院医学系研究科スポーツ医学・中田研

1. 術後、6週で全負荷をかけるようになっていて、その頃から関節水腫が発現している例が5例中3例と半数を超えています。2-3ヶ月でコラーゲンが吸収される時期と一致しているようです。最後の例の転機はわからないものの、最終的には落ち着いているようですが、その際に治療としてステロイドも局注されていると自然軽快なのかわからなくなるのではないのでしょうか。治療としてステロイドの局注がなされているのかどうか、処置の内容についてご教示ください。

【回答】

ご質問をありがとうございます。ご指摘の通り、本半月板修復療法において、術後に一時的に関節水腫例が5例中3例見られましたが、その後消退しております。経過中にステロイドの注射（関節内注射やその他の使用を含めて）は行った例はありません。関節水腫3例の処置内容は、3例とも関節液の吸引を行ないました。また、1例は関節液吸引とともにヒアルロン酸関節注射を行ない、その後、軽快しました。

一般的に、半月板修復術後のリハビリテーションにおいては、コラーゲン半月板補填材を用いない従来の関節鏡視下半月板縫合術においても、術後に全荷重となり、退院後に日常生活での歩行や階段昇降で活動度が上昇する時期である術後2-3ヶ月程度に一時的に関節水腫を認め、その後軽快して良好に経過する例があります。本症例での水腫の程度も、従来の半月板縫合術の術後経過で見られる一過性の関節水腫と同程度であり、特に重症例はありませんでした。

以上